

日韓の母親における「子育て観」の因子分析的研究[†]

金 娟 鏡*

Factor analytical study of concepts regarding child rearing in Japanese and Korean mothers

Yeonkyeong KIM

The present study compared differences in concepts regarding child rearing among 889 mothers in Japan and Korea. Factor analysis identified 2 common factors: "child rearing burden" and "separate identities". In addition, "value of life and responsibility for child rearing", "child on whom the mother pin her hopes" and "social duty" were identified as independent factors in Japan; whereas in Korea "social duty and child on whom the mother pin her hopes", "value of life" and "responsibility for higher academic career of child" were identified as independent factors. The independent factors in Japan and Korea were constructed by combining or separating factors of each country. Comparing the means of each item between two countries indicated that child rearing concepts in Japanese mothers were more individualistic and more burdensome than that of Korean mothers. Furthermore, in Korea and in Japan, mothers recognized themselves and their children as individuals, even though in Korean mothers, this concept was more confucianism. These results suggest that child rearing concepts of Japanese and Korean mothers are similar.

key words: concept of child rearing, motherhood, Japanese and Korean comparison

問 題

子育ての具体的な行動内容は、子どもをもち、育てることをどのように意味づけるか、またどのように育てるべきかといった信念などによって規定される。そして、人々がもつ子育てに対する意味づけ、信念などは、より大きな認知的概念枠である「子育て

観」¹⁾と呼ぶべきものを構成していると考えられる。

「子育て観」は、家族のあり方や親自身の生き方に関する信念とも連動して、自身が親からどのように育てられたか、周りの人々の子育てのありよう、自身が実際に子育てをとしての経験、育児書などの外部情報を通して獲得・変容される。こうした「子育て観」には、社会状況および時代の変化を超えて受け継いでいく側面と、社会状況や時代の変化を反映して変容していく側面がある。さらに、内国における文化継承・変容の側面だけではなく、国を超えての通文化的な側面や各々の文化がもつ差異的な側面も

[†] 本研究は、2000年度東京学芸大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。論文作成にあたりご指導くださいました高橋道子教授、投稿の際にご指導くださいました福富護教授に、心より感謝いたします。また、匿名の審査者から貴重なご助言をいただきました。記して深く感謝いたします。最後に、調査にご協力くださいました日韓の母親方に心からお礼申し上げます。

* 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
The United Graduate School of Education,
Tokyo Gakuhei University

1) 「子育て観」は、当人に意識化されていることもあり、無意識に保有されていることもある。本研究でいう「子育て観」の〈観 (concept)〉は、スキーマの概念に類似しているが、子育てに対する意味づけや信念の側面を強調したいことから、「子育て観 (concept of child rearing)」を用いることとした。

ある。

さて、上記のような「子育て観」の文化を超えての共通性、各文化の差異性を総合的に解明するためには、異文化間比較を試みるが必要となろう。比較することによって初めて、通文化的な側面を明らかにしたり、各文化の相対的な差違や特徴を見出したりすることができる（鈴木，2003）からである。さらに、自国文化の継承や変容に関する葛藤の様相を含め、国際的な情報・文化の交流によって国を超えて生じる文化変容などについて、示唆に富んだ情報を得ることができる可能性も考えられよう。

子育てに関する文化比較として著名なのは、柏木・東（1977）、東・柏木・Hess（1981）、勝浦（1991）、東（1994）などの日米比較研究である。しかし、これらの研究では、母子相互作用の質の相違や母親がしつけおよび就学前教育に何を重視しているかについての検討であり、子どもをもち、育てることの意味や信念そのものを問う研究ではない。日米を超えての比較としては、総理府（1981）による「国際比較：日本の子供と母親」、総務庁（1995、1996）による「子供と家族に関する国際比較調査」、日本女子教育会（1995）によって行われた「家庭教育に関する国際比較調査」などがあるが、子育てに関する比較調査を行ってはいないものの、母親たちが子育てをどのように意味づけ、どのように育てたいのかについては、いずれにおいても十分に検討されているとはいえない。

ところで、小学校の教科書に現れた親の育児役割を文化比較した塘（2000）は、日本と台湾のアジア文化間比較研究を行ったうえで、日本とイギリスおよびドイツとの比較を行ったところ、東西の育児文化の相違がより鮮明になったことに言及している。そこで塘は、東西の比較研究の分析の枠組みを明確にするためであっても、アジア諸国間の文化比較の中から取り出された分析の枠組みを考慮に入れることが必要であり、これによって異文化間研究の大いなる発展を期待できると主張している。山口（2001）も、欧米の理論を無条件に受容することを批判し、日本およびアジアの他の国の人々が自分たちを正しく理解するためには、アジア的視点からそれぞれの文化に適應できる理論を見出す研究を進めることが重要であるとしている。しかし、少なくとも「子育て観」に関しては、日本とアジアの他の国との比較

研究は見当たらない。そこで、アジアの一国である日本と他のアジアの国との比較研究が望まれよう。

ただし、比較に際しては、文化や社会環境が大きく異なる国との比較では、文化的背景や社会環境の差異のみが強調されることになり、類似もしくは共通する側面を検討することが困難となることが予測される。このような観点からすると、アジアの中で選抜するにあたっては、日本と同様に儒教的な文化背景をもち、少子化・高齢化などの社会条件が類似している国であることが求められよう。アジアの中で儒教的文化をもつ代表的な国は、中国、韓国などであるが、好個といえるのは韓国である。韓国は1990年代に入ってから経済成長とともに急速に社会が変化し続けている。日本とほぼ同じく、合計特殊出生率が低く（日本：1.33、韓国：1.30、文化日報（2002）より）、離婚率が高い（日本：2.09、韓国：2.50、韓国統計庁（2000）より）。また、日韓ともに性別役割分業が根強く、主に子育てを担っているのはいまだ母親であり、そのことを配慮して、本研究では実際に子育てに従事している母親たちの「子育て観」を探ることとした。なぜならば、「子育て観」が抽象的な概念としてではなく、現実に基づいた実感を伴う日韓の様相が明らかになると考えるからである。女性を取り巻く社会状況に関しては、日韓ともに女性の高等教育（大学）進学率も著しく高い（日本：48.7、韓国65.5、韓国教育人的資源部（2000）より）。また、年齢別の女性労働率の差異をみると、日本と韓国はともに、20～24歳と45～49歳をピークとし、30～34歳を谷間とする「M字型」を示している。このように、同じく儒教文化を背景とし、女性の高学歴化・少子化・女性の就業率など類似した社会条件をもつ日韓の比較を通して、先述したように「子育て観」を総合的に検討できると考えられる。

方 法

1. 調査の対象および実施

調査地点としては、学歴や社会経済的地位など、対象者のデモグラフィックな変数のバランスを取ることが容易であり、女性が多様な就業形態に従事することを可能にしている大都市圏に設定し、日本では東京都区内、韓国では釜山市内とした。

日本では、東京都区内にある幼稚園・保育園に子どもを預けている母親900名に調査票を配布し、

Table 1 調査対象者に関する基本的事項

		日 本	韓 国
年 齢		35.1 歳 ($SD=4.4$)	33.3 歳 ($SD=3.4$)
学 歴	中学卒	0.9%	1.0%
	高校卒	25.3%	40.3%
	専門・各種学校卒	22.7%	
	短大卒	23.2%	20.3%
	大学卒	25.8%	32.0%
	大学院以上卒	2.2%	6.3%
仕事の形態	専業主婦	51.1%	52.3%
	パート	17.3%	6.0%
	常 勤	16.6%	29.3%
	自営業	8.5%	6.7%
	在宅勤務	2.4%	2.3%
	内 職	3.9%	3.0%
	その他	0.2%	0.3%
子どもの人数		1.9 人 ($SD=0.7$)	1.9 人 ($SD=0.5$)
夫の年齢		37.9 歳 ($SD=5.7$)	36.2 歳 ($SD=3.6$)

注) 専門・各種学校卒は日本のみである。

622 名(回収率 69.1%)から協力が得られた。韓国では、東京の都区内に相当する、釜山市中心部の区内の幼稚園・オリニジップ²⁾に子どもを預けている母親 805 名に配布し、385 名(回収率 47.8%)から協力を得ることができた。そのうち、欠損値が多かったものを除き、さらに日韓の調査対象者の年齢、学歴、仕事の形態などの属性、子どもの年齢がほぼ均等になるようにした³⁾。最終的には、日本では 589 名の回答を、韓国では 300 名の回答を分析対象とした。

調査時期は日韓とも 2000 年 8 月～10 月である。日韓の各幼稚園・保育園(オリニジップ)に調査票の配布を依頼した。次いで、家庭で記入し、封をした調査票を、園を経由して回収した。Table 1 に調査対象者の属性を示す。

2. 調査内容

本研究での「子育て観」尺度(Table 2 を参照)は、田代(1981)、永久(1995)、柏木(1998)らの尺度を翻案し、日韓の比較が可能となるように、日本語版の「姓やお墓を継ぐ者が必要である」を韓国語版の調査票では「姓やジェサ⁴⁾を継ぐ者が必要である」と、韓国の実情に合わせて質問の内容の一部を変更した。回答は「まったくそう思わない」1 点から「とてもそう思う」5 点までの 5 段階で評定させた。なお、調査票は日本語版を先に作成し、韓国語版は日本語版を筆者(調査者)が翻訳した後、バイリンガルの韓国人に訳語のチェックを依頼し、修正した。

結 果

本研究では、子育て観の構造上の異同を検討するため、日本と韓国で別々に主因子法による因子分析を行った。固有値 ≥ 1.00 を基準とし、因子数の決定を試みた。因子の解釈にあたっては、バリマックス

- 2) 日本の保育園にあたるが、入園児の 20% は低所得の子どもを優先的に受け入れ、保育料を免除。3～5 歳児が主な対象となり、共働き家庭と専業主婦家庭を区別せずに保育している。
- 3) 学歴を高卒群(日本の場合、専門・各種学校卒を含む)と大卒以上群の 2 水準、仕事の形態を専業主婦群と有職群(パート、常勤)の 2 水準にそれぞれ分割したときに、日韓の間で大きな違いがみられたのは専業主婦群であった。そのため、日本の専業主婦群の比率を規準とし、日本と同程度の比率になるように、韓国の専業主婦群をランダムに選んだ。

- 4) 韓国のジェサ(祖先祭祀)は、家祭と墓祭に大別される。家祭は、三年葬の終了後も 4 世代を対象として、元旦やお盆を含め年に 3～5 回行われるが、墓祭は、5 世代以上の前の祖先に対して、毎年一定の日に墓地で行われる(嶋, 1994)。最近は、2～3 世代までの祖先に対する家祭だけの家庭が増えつつある(ソン, 1995)。

回転後の当該因子への負荷量が .350 以上の項目を中心に解釈を行った。

1. 日本における「子育て観」の因子構造

主因子法（バリマックス回転）による因子分析の結果、5 因子が抽出され、回転後の累積寄与率は 34.6% であった (Table 2)。

第 I 因子には「子どもがいることは大きなはりあいである」、「歳をとった時、子どもがいると心強い」、「自分の能力を生かすのも大事だが、今は子どもの方により時間を使ってあげたい」などの項目が高い負荷を示している。全体に子どもをもつことによるはりあいとか自己存在感、育てることの喜びや責任から構成されており、『生きがいと責任』と解釈できよう。

第 II 因子には「子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ」、「親の思うとおりの子どもに育てたい」、「自分ができなかったことを子どもにさせたい」な

どの項目の負荷が高く、その後も親から子どもへの期待や姓の継承を意味しており、『自分の夢を託す分身』と名づけることができよう。

第 III 因子については、「次の世代を作るのは、人としてのつとめである」、「子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ」という負荷の高い 2 項目から構成されている。子どもを産み育てることが、人としてのまた社会に対する義務であること示すことから、『社会的義務』因子と呼ぶことができよう。

次に、第 IV 因子には「子どもの世話は精神的に疲れる」、「子どものための経済的な負担は大きいと思う」などの項目の負荷が高く、残りの項目も夫婦の間に問題が起きやすいという内容である。項目内容は、子育てによる心理的・経済的コストの増大を示しており、一般的な子育ての負担感として集約できることから『子育てによる負担感』と命名できよう。

最後の第 V 因子は、「子育てだけではなく、もっ

Table 2 日本の「子育て観」の因子構造

No.	質 問 項 目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V
3.	子どもがいることは大きなはりあいである	.609	-.054	.135	-.160	.028
17.	歳をとった時、子どもがいると心強い	.540	.272	.003	.089	.048
2.	子どもをもつことで、自分が生きた証拠を残せる	.510	.241	.298	.031	-.170
18.	自分の能力を生かすのも大事だが、今は子どもの方により時間を使ってあげたい	.498	.064	.064	.084	-.053
1.	結婚して子どもをもつのが普通である	.494	.264	.264	.043	-.189
9.	子どもを産んだのは母親としての喜びを経験しなかったからだ	.412	.217	.097	.002	.086
21.	子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う	.352	.036	.034	.295	.072
16.	子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ	.265	.615	.159	.114	.038
10.	親の思うとおりの子どもに育てたい	.166	.569	.120	.176	-.169
12.	自分ができなかったことを子どもにさせたい	.169	.513	.115	.291	.088
6.	できるだけ学歴をつけてやるのが親のつとめだと思う	.159	.436	.270	.242	-.067
11.	姓やお墓を継ぐ者が必要である	.181	.384	.243	.050	-.105
8.	次の世代を作るのは、人としてのつとめである	.326	.078	.716	.078	.001
14.	子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ	.109	.351	.589	-.008	.147
4.	子どもの世話は精神的に疲れる	-.098	.095	-.077	.539	.076
7.	子どものための経済的な負担は大きいと思う	.206	-.049	.032	.478	.039
15.	子どもがいると夫婦の間に問題がたくさん起こりやすい	-.048	.216	-.175	.397	.111
13.	子育てだけではなく、もっと自分の能力を生かしたい	-.088	.048	.052	.109	.601
19.	親には親、子どもには子どもの世界がある	.103	-.235	-.041	.082	.396
残余項目						
5.	子どもがどのような道を選ぼうとそれを認めたい	.003	-.345	.062	.015	.269
20.	学歴社会は当然変わらないと思う	.022	.109	.137	.338	-.020
寄与率 (%)		9.930	9.925	6.054	5.049	3.664

注) 因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table 3 韓国の「子育て観」の因子構造

No.	質 問 項 目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V
14.	子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ	.588	.144	.079	-.043	.065
8.	次の世代を作るのは、人としてのつとめである	.576	.452	.076	.000	-.023
9.	子どもを産んだのは母親としての喜びを経験しなかったからだ	.533	.179	-.033	.093	.132
16.	子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ	.525	-.061	.350	-.018	-.032
11.	姓やお墓を継ぐ者が必要である	.499	.098	.146	.098	-.061
10.	親の思うとおりの子どもに育てたい	.444	.034	.061	.327	-.219
17.	歳をとった時、子どもがいると心強い	.410	.234	.395	-.124	.093
2.	子どもをもつことで、自分が生きた証拠を残せる	.293	.652	.157	-.099	-.001
1.	結婚して子どもをもつのが普通である	.042	.608	.124	-.010	-.096
3.	子どもがいることは大きなやりあいである	.204	.554	.246	-.152	.094
20.	学歴社会は当然変わらないと思う	.047	.097	.587	.089	.085
21.	子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う	.186	.119	.402	.177	-.002
12.	自分ができなかったことを子どもにさせたい	.321	-.089	.360	.321	-.149
6.	できるだけ学歴をつけてやるのが親のつとめだと思う	.117	.206	.349	-.103	.188
4.	子どもの世話は精神的に疲れる	-.048	-.145	-.075	.530	.134
7.	子どものための経済的な負担は大きいと思う	.045	.172	.246	.418	.093
15.	子どもがいると夫婦の間に問題がたくさん起こりやすい	.072	-.101	.083	.405	-.104
5.	子どもがどのような道を選ぼうとそれを認めたい	-.116	-.041	-.010	-.035	.622
13.	子育てだけではなく、もっと自分の能力を生かしたい	.132	-.011	.087	.067	.355
残余項目						
18.	自分の能力を生かすのも大事だが、今は子どもの方により時間を使ってあげたい	.123	.102	.316	.063	-.157
19.	親は親、子どもには子どもの世界がある	-.028	.128	.331	-.103	.242
寄与率 (%)		10.432	7.575	6.971	4.578	3.810

注) 因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

と自分の能力を生かしたい」、「親には親、子どもには子どもの世界がある」という負荷の高い2項目で構成されている。親と子どもがそれぞれ独立した存在であること、子どもの独自性を認める内容を示しているのが、『独立した人格としての親と子』と解釈することができよう。

2. 韓国における「子育て観」の因子構造

固有値 ≥ 1.00 を基準としところ7因子が抽出されたが、25回の反復で回転が収束できなかった。因子の固有値のスクリープロットをみたところ、第V因子以降は固有値の変化が横ばいであったため、日本との比較を考慮して、因子数を日本と同じく5に指定し、再度因子分析を行った (Table 3)。累積寄与率は、日本とほぼ同じ 33.4% であった。

第I因子には「子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ」、「次の世代を作るのは、人としてのつとめである」などの項目が高い負荷を示している。

これらの項目は日本での第III因子『社会的義務』に対応する。また、日本での第II因子『自分の夢を託す分身』に相当する「子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ」、「姓やお墓を継ぐ者が必要である (韓国語訳では「姓やジェサを継ぐ者が必要である」) などの (韓国では妻の姓は婚姻によって変わらないが) 夫の一族の姓やジェサを継ぐ子を通して、自分の夢をかなえようとする内容が付け加わっていることから、『社会的義務と自分の夢を託す分身』と命名できよう。

第II因子は「子どもをもつことで、自分が生きた証拠を残せる」、「結婚して子どもをもつのが普通である」、「子どもがいることは大きなやりあいである」という負荷の高い3項目からなる。日本の第I因子と比べると、母親としての責任を示す項目が含まれておらず、子育てによる自己の存在感や子育てに対する意欲のみを示していることから、『生きがい』と命名できよう。

第 III 因子については「学歴社会は当分変わらないと思う」、「子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う」、「できるだけ学歴をつけてやるのが親のつとめだと思う」などの項目が高い負荷を示している。これらの項目は、子どもに何よりも高学歴を得させることが子育ての成功とみなされる、今日の韓国の高学歴重視風潮を示すものであり、韓国の特有性と考えられる。さらに、子育ての主な責任者が母親であることを示しているのも、『子どもの高学歴への責任』と解釈できよう。

次に、第 IV 因子には、「子どもの世話は精神的に疲れる」、「子どものための経済的な負担は大きいと思う」の、日本と全く同じくコストに関する 3 項目が高い負荷を示しているのも、日本と同様に『子育てによる負担感』と命名できよう。

最後の第 V 因子では「子どもがどのような道を選ぼうがそれを認めたい」、「子育てだけではなく、もっと自分の能力を生かしたい」の 2 項目が高い負荷を示していた。日本と違って、親と子の独自性を

示す項目と子どもの独自の人生を容認する項目が入れ代わっているが、日本と同様に、母親が子育て以外に自分の能力を生かしたいとの内容を示す項目が含まれていることでもあり、内容的にはほぼ同じとみなすことができよう。そこで、『独立した人格としての親と子』と名づけることができよう。

3. 各項目得点の日韓比較

日本では『生きがいと責任』、『自分の夢を託す分身』、『社会的義務』が、韓国では『社会的義務と自分の夢を託す分身』、『生きがい』、『子どもの高学歴への責任』となっており、互いに相手国の因子の分離や融合がみられるとともに、韓国特有の因子が抽出されている。さらに、同一の因子である『独立した人格としての親と子』においても、内容に若干の違いがみられることから、項目ごとに平均値の差の検定 (t 検定) を行った。その結果を Table 4 に示す。日韓の得点に有意差のない項目が 8 項目、日本が韓国より有意に高い項目が 4 項目、韓国が日本よ

Table 4 「子育て観」各項目の平均値

No.	質問項目	平均値		t 値	
		日本	韓国		
(a) 日韓の得点に有意差のない項目					
19.	親には親、子どもには子どもの世界がある	4.7	4.3	1.19	<i>n.s</i>
3.	子どもがいることは大きなはりあいである	4.4	4.4	1.09	<i>n.s</i>
5.	子どもがどのような道を選ぼうとそれを認めたい	4.1	4.1	.88	<i>n.s</i>
18.	自分の能力を生かすのも大事だが、今は子どもの方に時間を使ってあげたい	3.8	3.8	.14	<i>n.s</i>
8.	次の世代を作るのは、人としてのつとめである	3.3	3.4	.65	<i>n.s</i>
9.	子どもを産んだのは母親としての喜びを経験しなかったからだ	3.1	3.1	.09	<i>n.s</i>
12.	自分ができなかったことを子どもにさせたい	2.7	2.7	.00	<i>n.s</i>
11.	姓やお墓を継ぐ者が必要である	2.2	2.2	.69	<i>n.s</i>
(b) 日本の得点が韓国の得点より有意に高い項目					
7.	子どものための経済的な負担は大きいと思う	3.9	3.5	5.76	**
21.	子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う	3.9	3.7	2.76	*
4.	子どもの世話は精神的に疲れる	3.5	2.7	10.44	**
15.	子どもがいると夫婦の間に問題がたたくさん起こりやすい	2.6	2.0	8.44	**
(c) 韓国の得点が日本の得点より有意に高い項目					
20.	学歴社会は当分変わらないと思う	3.8	4.0	3.36	*
13.	子育てだけではなく、もっと自分の能力を生かしたい	3.8	4.0	3.54	**
17.	歳をとった時、子どもがいると心強い	3.6	3.9	5.16	**
1.	結婚して子どもをもつのが普通である	3.2	4.3	15.12	**
6.	できるだけ学歴をつけてやるのが親のつとめだと思う	3.1	4.3	17.16	**
2.	子どもをもつことで、自分が生きた証拠を残せる	3.0	3.8	11.16	**
14.	子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ	2.4	2.6	3.33	**
10.	親の思うとおりの子どもに育てたい	2.2	2.4	2.12	*
16.	子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ	2.2	3.0	10.62	**

* $p < .01$, ** $p < .001$

り有意に高い項目が9項目であった。

考 察

日韓の因子構造の検討に際しては、両国の各項目得点の平均値(レンジ; 1点~5点)と合わせ、それぞれの因子の内容の共通点や差異点について考察を進めていきたい。

「子育て観」の因子分析の結果、既述のように、日韓で同様に『子育てによる負担感』、『独立した人格としての親と子』因子が得られた。まず、『子育てによる負担感』について比較してみると、項目4「子どもの世話は精神的に疲れる」、項目7「子どものための経済的な負担は大きいと思う」、項目15「子どもがいると夫婦の間に問題がたくさん起こりやすい」の3項目のいずれにおいても、日本が韓国より得点が高い。つまり、日本のほうが子育ての負担感を韓国より強く感じていると解釈できよう。ここで得点をみると、項目7は日韓ともに中央値3.0を超えている。つまり、強度に若干の差はあるものの、日韓ともに子育てにかかる経済的費用について、ある程度負担として感じているといえる。一方、項目15は日韓ともに中央値を下回るものであり、子どもの存在が夫婦間に大きな問題を生じさせないことを示していると考えられる。ところが項目4では、中央値を境に日韓の相違がみられた。すなわち、日本の母親は子どもの世話で精神的にも疲れを感じているのに対して、韓国の母親は精神的にはあまり疲れていないことを意味する。このことから、『子育てによる負担感』の日韓の決定的な違いは、子どもの世話を母親自身がどのように受け止めているかという母親自身の主観的意識状態にあると推量される。柏木・永久(2003)が主張するように、日本の母親が子育てに精神的な疲れを感じているのは、日本では母親自身の生き方と子育てが一種の対立的な関係にあることを示唆するであろう。

一方、今ひとつの日韓で共通する『独立した人格としての親と子』因子に関しては、次のように解釈できよう。項目5「子どもがどのような道を選ぼうとそれを認めたい」、項目19「親には親、子どもには子どもの世界がある」の項目得点は、日韓ともに中央値の3.0を大きく上回り、4.3を超えている。日本が1970年代後半から子どもの独自性を認めていた(今泉・財前・末広, 1976)のに対し、韓国では

儒教の影響で子どもを未熟な存在として捉え、子どもへの干渉や支配が多かった(リ, 1983)。しかし、ケモン児童研究所で行った1988年度の調査によると、韓国においても子どもを一人の人格として認識するように移行していることが明らかにされている。こうした移行は、本研究でも、日本においてだけでなく、韓国においても因子として抽出されたことから窺える。また、自己の実現を示す項目13「子育てだけではなく、もっと自分の能力を生かしたい」も日韓ともに項目得点が4.0に近いものである。日韓いずれの母親たちも、子育てだけに終始することを「足かせ」(柏女, 1995)と感じているであろう。日韓の母親が子どもを自分とは別の存在として認識し、子育てだけではなく個人としての自分の能力を生かしたい願望を抱いていることは注目される。

次に、日韓で違いがみられた因子について検討する。日本では『自分の夢を託す分身』、『社会的義務』の2つの因子が独立していたが、韓国では項目に多少の違いはあるが、日本の両因子が融合された形で『社会的義務と自分の夢を託す分身』として抽出された。日本の『自分の夢を託す分身』、『社会的義務』の両因子と、韓国の『社会的義務と自分の夢を託す分身』因子の間で共通する項目8「次の世代を作るのは、人としてのつとめである」、項目10「親の思うとおりの子どもに育てたい」、項目11「姓やお墓(韓国語訳では「お墓」は「ジェサ」に差し替えられている。以下同様)を継ぐ者が必要である」、項目14「子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ」、項目16「子どもは自分の夢や理想を託せる存在だ」の得点をみると、項目8、項目11以外は相対的に韓国が日本より高い。すなわち、韓国のほうが項目得点からは、より子どもを自分の夢を託せる存在として、また子育てを社会に対する義務としてみなす程度が強いといえる。総理府の国際比較調査(1981)によると、日本・韓国はともに欧米の他国に比べ、子育てを社会に対する義務、規範として捉えていた。また、田代(1981)が参加した女性生活史研究会の日本国内の調査でも、「社会的規範としての子育て」が最も高い寄与率を示していた。ところが、約20年が経過した本研究によると、日本では『社会的義務』は第III因子として出現するものの、第I因子の『生きがいと責任』や第II因子の『自分の夢

を託す分身』よりも、低い寄与率を示すようになっている。日本において『自分の夢を託す分身』が『社会的義務』とは独立した因子として抽出されたことは、柏木 (2001) が言及したように、「社会のためより自分のため」へと、自分自身にとっての子育ての意味を追求するように変化してきたことを反映していると推測できよう。他方、韓国では、『社会的義務と自分の夢を託す分身』が第1因子として最も高い寄与率を示していることから、『社会的義務』に『自分の夢を託す分身』としての個人的意味が包含されることで、社会的義務としてだけではなく、個人にとっての意味づけの高まりも生じていると解釈することができよう。

ところで、先述した項目 10, 項目 14, 項目 16 の得点は、相対的に日本より韓国が高いが、いずれも中央値 3.0 以下と低い。さらに、項目 11 では日韓の間で得点の差はなく、ともに中央値を下回る 2.2 である。日韓の因子構造の比較、また項目得点の相対的比較からでは、一見すると、韓国が日本より社会的義務としての価値を重視しており、親の子どもへの期待も強いようにみえる。しかしながら、項目の得点値を基準にすると、両国ともに先述したように『独立した人格としての親と子』を容認し、子育てを『社会的義務』とみなす意識は低い方へ移行していると考えられる。なかでも注目に値するのは、「姓」や「お墓 (ジェサ)」を継ぐという儒教的伝統と結びつくと考えられる項目 11 である。とくに、韓国では「姓」や「ジェサ」は男児にしか継ぐことができない。韓国では婿が嫁側の姓を継ぐことのできない父系血統主義である。柏木 (1998) によれば、日本では 1987 年より数年前から男児より女児選好が顕著にみられるようになっている。韓国において、「姓」や「ジェサ」を担う男児に固執しない方向への意識転換は、儒教的伝統規範の減衰、日本よりも根強く残っていた男児選好意識が弱まってきたことを意味し、今後は日本のように男児より女児を選好するように転換する可能性さえ示唆していると推察されよう。

最後に、日本の『生きがいと責任』因子、韓国の『生きがい』と『子どもの高学歴への責任』因子について考察する。まず、責任という内容を示す項目が、日本では『生きがい』と結びついているのに対して、韓国では韓国特有の要素と考えられる高学歴志向と

合わせられ、それぞれ責任を包含する因子として抽出された。日韓ともに『生きがい』と関連すると考えられる項目 3「子どもがいることは大きなはりあいである」は日韓の得点が全く同じ 4.4 で差がなく、ともに子どもを生活のはりあいとして強く感じていた。しかし、項目 1「結婚して子どもをもつのが普通である」、項目 2「子どもをもつことで自分が生きた証拠を残せる」は、日本の得点が中央値の 3.0 付近であるのに対し、韓国の得点は 4.0 前後であり有意に高い。このことから、韓国では結婚し、子どもをもつことは自明な当為であるが、日本は韓国に比べると子どもをもつかもたないかを個人が選択できる自由がはるかに大きいと推測できる。換言すれば、韓国では女性は子どもを産むべきである、子どもを産んで一人前という儒教に基づいた伝統的価値観が今なお根強く残っているといえよう。そして、このような価値観が韓国の母親に宿命のように内面化され (ハン, 1999)、子育てに伴う精神的負担さえ無意識的に抑圧しているのではないかと考えられる。

他方、韓国の『子どもの高学歴への責任』因子の項目 6「できるだけ学歴をつけてやるのが親のつとめだと思う」のように、学歴に関する項目が韓国では独立した因子に包含されているのに対し、日本では『自分の夢を託す分身』因子に包含されている。ここで、項目 6 の得点をみると、日本では 3.1 と中央値に近いが、韓国では 4.3 と中央値をはるかに超えている。つまり、韓国では子どもの高学歴は親の責任であり、ジョ (1995) が言及するように、子どもの教育に全力を注ぐことこそ、子どもと家族の未来が確実に保証されるという価値が蔓延していることを反映するものであろう。これに対し日本では、学歴は子どもに自分の夢を託すための一つの構成要素として位置づけられていると思われる (金, 2002)。さらに、項目 21「子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う」が、日本では個人の生きがいに伴う責任と結びついているが、韓国では高学歴を示す因子に内包されていることも、韓国では子育ての責任の中心は子どもの受験にあり、「受験熱」に励む母親の姿をむしろ「子どもを想う母親」として理想化している (山本, 2000) からではないかと解釈できるであろう。項目得点をみると日韓ともに中央値を超えており (順に, 3.9, 3.7)、ほぼ

同じ数値であるが、統計的には日本が韓国より若干高い。子育てに対する強い責任感が、日本では、母親の心理的負担感を増幅させている要因の一つではないかとも考えられよう。

結 論

これまで、「子育て観」を日本と韓国の比較により検討した。因子分析による異同と項目ごとの平均値の差の検定 (*t* 検定) を検討した際の諸結果を総合して考えるならば、以下のように論考することができよう。

NHK 放送文化研究所で行われた「現代日本人の意識構造に関する調査」(1988)によると、従来は「家」、「地域」、「国家」などという個人の属する共同体の中での個人が果たすべき役割に関して共通の認識があったが、現在では共同体への帰属意識が薄れ、個人の生活の充実がもっぱらの関心事になっているという。そして中澤 (2000) は、「個人重視」の発想が一般化する中で、個人の果たすべき役割についての認識が多様化したことを指摘している。一方、水野 (2002) によれば、韓国人の意識構造の特徴として「儒教的伝統価値意識」と「欧米的個人主義」があげられるという。そのうち、「儒教的伝統価値意識」の原型となっているのが、「家」を中心とした「家族主義」であり、韓国人の社会規範はすべて「家族主義」に起因すると考察している。そして韓国社会に浸透しているこれらの二つの特質が齟齬をきたして、価値意識の動揺をもたらすが、いまだに「儒教的伝統価値意識」はかなり濃厚なまま残存しているとされている。本研究で得られた「子育て観」に関する日韓の因子構造の差異、項目得点を加えた相対的な差異から、韓国の母親は、日本に比べ「より儒教に基づいた伝統的「子育て観」を、日本の母親は、韓国に比べ「より私事化した「子育て観」を示唆する概念枠をもっていることが読み取れよう。

ところで、項目得点の中央値の 3.0 を境とし、日韓の一方が高く、他方が低い項目に着目すると、該当するものは 21 項目のうち、わずか 2 項目であり、このことは日韓の「子育て観」は、相対的な差があるに過ぎないことを示すといえよう。そして、日韓ともに子どもを親とは独立した存在として認識し、母親自身も「個」としての自分の人生を求めるようになっていた。さらに、子育てを社会的義務とみな

す意識やお墓 (ジェサ) を継ぐ者を必要とする意識の低さから、日韓ともに儒教的規範が低下しつつあると考えられる。つまり、日韓の「子育て観」に程度の差はあるが、同じく脱儒教化の方向へ進んでいる類同化⁵⁾の側面が示唆され、因子構造の差異や項目得点の相対的な高低差の検討だけでは看過しがちな、日韓の子育ての方向性が明らかにされたといえよう。

次に、日本では子育てによる心理的負担感、韓国では子どもの高学歴と関連する項目について検討したい。内閣府の「国民生活に関する世論調査」(2002) では、子育てによる心理的負担感が、今日の日本の少子化の背景であることを指摘している。とくに、子育てに心理的負担を感じる理由としては、「自分の自由な時間が使えなくなる」、「大変さを配偶者など周りの人にわかってもらいたい」との回答が女性に多くみられた。他方、韓国統計庁の「統計から見る女性の生活」(2002) によると、私的教育費の負担が今日の韓国の少子化の原因となっていることを明らかにしている。韓国における子どもの高学歴に対する親の執着は、「ハンプリ教育 (筆者注: ハンプリとは恨 [ハン] を追い払うという意味)」(ジョ, 1995) といわれている。日本女子社会教育会 (1995) が行った日本、スウェーデン、アメリカ、韓国、イギリス、タイの 6 カ国の比較によると、「子どもに大学教育を受けさせたいか」という質問に対し、日本では子どもの性によって大きな違いがみられ、女子に大学までと考える比率は、すべての国の中で最低であった。しかし、韓国は他の国に比べると、唯一、男子より女子に大学教育を受けさせたいとの比率が高い国であった。本研究からも、子どもの性別にかかわらず高い学歴を期待する、韓国ならではの学歴観が「子育て観」の一つとして示唆された。日韓の少子化という社会問題の背景に、それぞれの文化事情を反映した「子育て観」の特徴が関わっているのではないかと推察されよう。

5) 野村 (2001) は、国情が異なるとはいえ、等しく経済危機と構造改革の試練を迎えた日韓両国では、生き方や価値観の面でも「共時性」が生まれつつあることを指摘している。ただし、野村の「共時性」は、共通性ととも同時発生的な意味を含んでいるため、本研究では野村の概念を援用し、時間差による共通性といった意味で「類同化」と呼ぶことにした。

以上のように、日韓ともに儒教に基づいた「子育て観」から次第に脱却し、欧米的個人主義の方向に向かっている点においては、類同化していた。しかし、日本より韓国のほうがより儒教文化を継承しているという差異性があり、日本では子育ては心理的負担感と結びつき、韓国は高学歴と関連する特徴が示唆された。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本研究では、このような類同化、差異性、特徴を生み出した各々の文化における諸要因を、直接吟味することはできなかった。今後は、関連する要因の検討や要因間の因果関係の究明が必要であろう。

引用文献

- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育. 東京大学出版会.
- 東 洋・柏木恵子・Hess, R. D. 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達: 日米比較研究. 東京大学出版会.
- 文化日報 2002 低出産時代: 新人口政策に苦心 (2002/9/23 付).
- ハン ギュリャン 1999 女性と結婚生活: 韓国. 片山隆裕 (編) アジアの文化人類学. ナカニシヤ出版, Pp. 29-44.
- 韓国統計庁 2000 人口動態年報.
- 韓国統計庁 2002 統計から見る女性の生活.
- 韓国教育人的資源部 2000 教育統計年報.
- 柏木恵子 1998 社会変動と家族発達: 子どもの価値・親の価値. 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学. ミネルヴァ書房, Pp. 5-50.
- 柏木恵子 2001 子どもという価値: 少子化時代の女性の心理. 中公新書.
- 柏木恵子・東 洋 1977 日米の母親における幼児への発達期待及び就学前教育観. 教育心理学研究, 25(4), 242-253.
- 柏木恵子・永久ひさ子 2003 女性にとっての子どもの価値: なぜ, 少子化か. 柏木恵子・高橋恵子 (編) 心理学とジェンダー. 有斐閣, Pp. 115-119.
- 柏女霊峰 1995 出生率の低下と子ども・子育ての福祉. 家族研究年報, 20, 2-11.
- 勝浦クック範子 1991 日本の子育て・アメリカの子育て: 子育ての原点をもとめて. サイエンス社.
- ケモン児童研究所研究報告 1988 韓国父母の子ども教育観および養育. 態度調査研究.
- 金 娟鏡 2002 子育て観の韓日比較: 「文化としての子育て」. 日本保育学会第 55 回大会発表論文集, 834-835.
- 今泉信人・財前千江美・末広和子 1976 現代の母親の児童観, 育児観, 育児の実態に関する研究 1: 現代の母親の児童観の一般的傾向の検討. 福岡教育大学紀要第 4 分冊教職科編, 25, 67-79.
- リ ウォンヨン 1983 母親の子ども教育観および養育態度と幼児の発達との関連研究. 梨花女子大学大学院博士論文 (未公刊).
- 水野邦彦 2002 韓国社会意識粗描: 現代韓国人と社会. 花伝社.
- 永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情. 母子研究, 47, 50-57.
- 内閣府 2002 国民生活に関する世論調査.
- 中澤美依 2000 社会生活とコミュニケーション 第 2 節 語り合えなくなった日本人. 橋本満弘・北出亮・會澤まりえ (編) 日本社会とコミュニケーション. 三省堂, Pp. 11-19.
- NHK 放送文化研究所 (編) 1998 現代日本人の意識構造 (第 IV 版). 日本放送出版協会.
- 日本女子教育会 1995 家庭教育における国際比較調査報告書.
- 野村 進 2001 アジアの歩き方. 講談社現代新書.
- 嶋 陸奥彦 1994 祖先祭祀. 伊藤重人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男監 (修) 朝鮮を知る事典. 平凡社, Pp. 256-257.
- ソン スンヨン 1995 家庭儀礼. 女性韓国社会研究会 (編) 韓国家族文化の今日と未来. 社会文化研究所, Pp. 251-292.
- 総務庁 1995 子供と家族に関する国際比較調査報告書.
- 総務庁 1996 子供と家族に関する国際比較調査報告書.
- 総理府青少年対策本部編 1981 国際比較: 日本の子供と母親. 国際児童年記念調査最終報告書.
- 鈴木淳子 2003 ジェンダーの比較文化的研究: 日本女性の特性はこの 30 年でどう変わったか. 柏木恵子・高橋恵子 (編) 心理学とジェンダー. 有斐閣, Pp. 115-119.
- 田代俊子 1981 夫・子・老親と女性: 家庭という場をめぐる. 女性生活史研究会 (編) いま女性は 福村出版, Pp. 77-116.
- 塘利枝子 2000 北山・宮本論文に対するコメント (特集: 文化心理学の展開). 心理学評論, 43(1), 82-86.
- 山口 勸 2001 アジアの社会心理学. 山口 勸 (編) 社会心理学: アジアの視点から. 放送大学教育振興会, Pp. 11-19.
- 山本かほり 2000 儒教規範のなかの女性: 韓国女性の社会的地位. Pp. 44-65.
- ジョ ソンスク 1995 家族の子ども教育. 女性韓国社会研究会 (編) 韓国家族文化の今日と未来. 社会文化研究所, Pp. 165-215.

(受付: 2003. 2. 3, 受理: 2003. 9. 10)